

令和4年度入学者一般選抜入学試験問題

(C日程 国際地域学部)

小論文

注意事項

- 1 試験時間は、午前10時から午前11時30分までである。
- 2 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 3 この試験では、問題冊子(4ページ)、解答用紙3枚及び下書き用紙1枚を配付する。
- 4 試験開始の合図があつてから、解答用紙に受験番号を必ず記入すること(氏名の記入は不要)。解答用紙は3枚あるので、必ず3枚すべてに記入すること。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に縦書きで記入すること。所定の解答欄以外に記入した解答は無効である。
- 6 問題冊子及び解答用紙にページの欠落や印刷不鮮明な部分等がある場合は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 7 原則として、試験時間中の途中退室は認めない。ただし、具合が悪くなつた場合、トイレに行きたくなつた場合等は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 8 試験終了の合図があつたら直ちに筆記用具を置くこと。
- 9 試験終了の合図があつて筆記用具を置いたら、机の上に問題冊子と下書き用紙を重ねて置き、その上に表にした解答用紙を問一・問二の解答用紙が上になるように重ねて置くこと。
- 10 試験監督者の許可があるまで退室しないこと。

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

かなり古い文献になりますが日本の社会の中になぜ対話が根づかないのか、その理由を分析した三冊の本^(注)を挙げたいと思います。そのうち、土居健郎と中根千枝の本は、多くの人に読まれた有名な本なので読んだ人も多いでしょう。これらの本の中では、「対話」という言葉こそ使われていませんが、対話しない(できない)日本人を個人と社会の両面から、鋭く分析しています。いわゆる教養書でありながら、研究者としての研鑽を積んだ両氏の固有な分析は日本人論として海外でもひろく読まれています。

たとえば土居健郎の『甘えの構造』(弘文堂、一九七一年)は、次のように言います。

日本人は(異文化がまじりあわない島国という歴史があるためか)、一体感を求める気持ちは強く、欲求を察してもらいたいという受け身的愛の文化を持つているので、客観的に事実を分析し、対等に討論することで解決を見いだすという文化が根づいていない。言葉に出して主張するのではなく、相手に気持ちを汲み取ってほしい、相手の愛情を当てにするという文化である、と。

たしかに土居の指摘は当たっているのですが、しかし、それは察することにいつも察し間違いがないという社会でないか、もし一方的に察したことが間違っていたら、悲惨な結果を招くでしょう。「お言葉に甘えまして」という言葉も、もし甘えが相手に許容されなければ、逆に嫌悪感を持たれるでしょう。察し合うことで満足する——それは多くの外国人が往き来し、異文化が歴史的

に入り混じった現在の社会では、通用しなくなっていると思います。

愛してもらいたいという相手の心の底にある欲求を察する、という日本の文化に対して、土居は必ずしも否定的な価値判断をしているわけではありません。しかし、察し間違いがないように察するには、双方が同質の感情や考えを持っているのでなければ通用しないことを自身の海外経験から、明らかにしています。甘えるということは、お互いに感じていることが同じだと信じているおめでたい環境の中の風習でもあるわけです。

たとえば、「どうぞごゆっくり」と言われるままにいつまでも長居すると、気が利かないとか、ずうずうしいとか言われて敬遠されます。

甘えが許される状況か許されない状況を判断するのは、異文化の人、価値観の違う人には難しいことです。私はたびたび外国人から、「遠慮ってどういうことですか」と聞かれて、うまく説明ができませんでした。

「自分がある」人は甘えをチェックでき、甘えに引きずられる人は自分がない」という土居の言葉は、日本人にだけ通用する言葉ではないかと思えます。

たとえば、自分の気持ちを察してくれる甘える相手を持っていない人は、甘えられる相手にたまたま出会うと飢餓感から相手の迷惑もかえりみず、無制限に相手に甘えかかってしまい、結局は人間関係を破綻させてしまいます。相手の立場に立つてみることでできる人は、自分自身の自我の確立ができていて人で、これ以上、相手に負担をかけると相手もつぶれてしまうことが分かり、適度に自分の甘えたい気持ちをチェックできる(コントロールする)でしょう。

(注) この問題文では、「三冊の本」のうち二冊について言及した部分を取り上げた。

それを言葉に出して「○○してもいいですか？」と聞き、「それでは困ります」と言うかわりに、察し合ってきたのが土居の言うこれまでの日本人だと思えます。^①

察する文化、甘えを許容する文化、依存の文化は、対話やディスカッションを必要としない文化です。言葉にする重要性をあまり認識していない社会です。

しかし、『甘えの構造』から四五五年。その間に進んだ個人化と分衆と言われる階層化と、もはや平均では表せない格差社会の到来は、察するという伝統に黄信号、いや赤信号を与えているのではないのでしょうか。

空気を読む能力がない人を軽蔑する人もあれば、空気を読むことに左右されて主体性に欠ける人を軽蔑する人もいます。現在の社会では、部分的共感主義、利他的同質性があり得ても、同質思考、同質感覚でもたれ合うことが、はたして現実に可能なのか、私は懐疑的です。

言葉に出して言わなくても察し合える伝統的パターンを持っているせまい世界では、たしかに互いに共感し合うことで、人を傷つけずにすんだり、慰められたりするでしょう。

しかし他方では、異なっている人間同士であればこそ、対話によって、新しい理解の地平を拓くという、よろこびもあるのです。対話する社会とは、多様な思考、多様な感受性に出会い、想像力を豊かにする社会でもあります。

土居もまた、一方では甘えたい（一体感を持ちたい）という人間の欲求を肯定しながら、他方では単一の価値観を持つ唯一の集団しかない社会では、個人の権利は守られない、とも言っています。

もう一つの日本人論として有名なのが中根千枝の『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書、一九六七年）です。

すでに紹介した土居の研究方法は、個人の意識および精神の安定を失った患者の状態から観察して、「甘え」という一体感を持ちたい欲求に普遍性があることを洞察したものです。そして日本の社会がその甘えを容認する社会であることを浮き彫りにしたものでした。

それに対して中根の社会人類学的研究方法是、同じ近代社会の制度を持つ国であっても、その社会の人間関係や、組織の運営方法、個人と集団のかかわり方などは、まったく異なっていることに注目して、日本の社会が単一性を土台にしたタテ社会であるという結論を導き出しています。^②

近代的な資本主義国家では、企業とか労使関係とか教育制度とか都市への人口集中などの共通した社会的類型がみられます。しかし、制度や組織とは異なるところで、表には見えない形で、人間の考え方、日本のような社会があることを指摘しているのです。

たとえば、日本では、契約とか資格とか万人に理解しやすい規則によって社会が律されるよりは、特殊な人間的な関係で社会的なとり決めが行われる傾向が強いという考察です。

日本では、個人が国家とか会社とか学校とか家族などの集団に、全面的に所属し、その集団の一員として一体感を持つことを強制されます。ある集団に所属する個人が、同種の他の集団とも関係を持ち、両方に所属することはほとんどないのです。ある書道の流派に属する人は、他の書道の流派に属することはなく、あるサッカークラブ員が他のサッカークラブに所属することもありません。もし、そのようなことをすれば、裏切り者とみなされるからです。

今では、国家という単位さえ超えた集団がいくつもあり、それは営利的な私企業であることもあれば、価値観を共有する非営利の市民の集団であることも

あります。

けれども日本国内では、専門性によって横断的に横の関係がつけられるよりも、先輩・後輩、入社何期生、××大学卒というグループのほうが、無理なく親しい関係ができるのです。年功序列は日本人に認められやすい制度ですが、個人の能力によって引き抜かれた人事制度は、いまもなお一般的とは言えません。産業別労働組合よりも企業内労働組合のほうが圧倒的に力を持っています。

(中略)

日本で組織を動かすのは市民社会で公認されたルールではなく、上下の人間関係です。スポーツ界でも監督のために頑張って勝ちたいチームもあります。論理的・科学的にみて、どんなにおかしいことであっても、タテの関係がすべてを動かす社会は、普遍性でつながる横の関係をつくることができませぬ。二〇二〇年に開催される東京オリンピック・パラリンピックのエンブレム問題も、審査員が、お目あての好意を持つ人の作品に対していい評価をし、評価理由についての情報公開をしたがりませぬ。それでは対話が入りこむ余地はありません。

中根の著書に戻ると、彼女は、日本人の対話には弁証法的な発展がない、ほめる書評とけなす書評しかないように、「ごもつともで」という一方通行か、反対のための反対か、両者は、はじめと同じところにいて、弁証法的な対話にならない、と、痛烈な批判をしています。日本人が話せるという場合は、はじめから気が合っているか、一方が自分がある程度犠牲にして、相手に共鳴、あるいは同情するふりをすることが前提になっている場合だと断じています。

(中略)

中根は、議論や対話ができないその条件を支えているのは、社会としての強い単一性である、と以下のように結論づけています。

この日本列島における基本的文化の共通性は、とくに江戸時代以降の中央集権的政治権力にもとづく行政網の発達によって、いやが上にも助長され、強い社会的単一性が形成されてきたのである。さらに近代における徹底した学校教育の普及が人口の単一化にいつそう貢献し、とくに戦時の挙国一致体制、そして、戦後の民主主義、経済の発展は、中間層の増大拡大という形をとりながら、ますます日本社会の単一化を推進させてきたものといえよう。

中根のこの論説もまた、土居と同じように、対話が根づかなかつた理由を、単一社会によって説明しているのです。

出典：暉峻淑子『対話する社会へ』岩波新書 二〇一七年 一部改変

傍線と注は出題者による。

設問

問一 傍線部①「察する文化、甘えを許容する文化、依存の文化」に対して著者が懐疑的である理由を、一〇〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部②「単一性を土台にしたタテ社会」に対する著者の評価を、一五〇字以内で説明しなさい。

問三 現代社会において対話を持つ意義や重要性について、著者の考えを参考にしながら、あなたの考えを六〇〇～八〇〇字で述べなさい。